

地域支え合い情報

[2016年1月20日発行]

本体 286円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



5歳から70歳代までが在籍する「渡波獅子風流塾」

特集

伝統の芸能や祭りが つむぐ地域の絆

- 獅子と太鼓の魅力で多世代交流 ③
わたのはししふり
渡波獅子風流塾（宮城県石巻市）
- 住民が愛好会結成し集落の盆踊りを復活 ⑤
佐倉祭り愛好会（福島県昭和村）
- 祭りは参加するもの！地域住民をつなぐ虎舞 ⑦
大石虎舞（岩手県釜石市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント ⑧
（東北福祉大学 総合福祉学部 教授 金政信さん）

場の力②⑨
第三地区サロンきじま（山形県山形市）

まちの仕組み③⑩
行政、社協、NPOらが役割を分担し密接に連携（福島県郡山市）

まじわる災害公営住宅⑫⑬
泉中央南復興公営住宅（宮城県仙台市泉区）

支え合い
「S-1グランプリ 第3回いがす大賞」出場者決定！⑬

ともに生きるためのヒント【最終回】⑬⑭
大友愛美さん（特定非営利活動法人ノーマライゼーションサポート
センター こころんく東川 副理事長／北海道東川町共生サロン
こころん・相談センターこころん 運営者／ソーシャルワーカー）

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ⑮

暮らしを支える支援員⑰⑱
支え合いの地域づくりを目指して
七ヶ浜町社会福祉協議会（宮城県七ヶ浜町）

特集



伝統の芸能や祭りがつむぐ

地域の絆



近頃、祭りごとなどの伝統行事や伝統芸能にふれる機会が減ってしまった人も多いのではないのでしょうか。

昔からその地域で営まれてきた季節行事や、

そこで披露される歌謡、舞踊などは

コミュニティのはたらきを強める力をもっています。

祭りの準備のために話し合いを重ね、

祭りの場を集えば、より多くの人たちと

祭りの魅力を分かち合うことができます。

芸能の継承にも、

伝えようとする人と、学びとろうとする人の間に

密接なやりとりが伴います。

伝統を楽しもうとする気持ち、守ろうとする熱意が、常に住民同士の新しいつながりを築いてきました。

祭りごとや芸能の世代を超えた引き継ぎを繰り返し、担い手を変えながら、地域は常に生まれかわっていきます。





5歳～中学3年生による太鼓練習

獅子と太鼓の魅力で多世代交流

わたのはししふり
◎渡波獅子風流塾（宮城県石巻市）

ポイント

- 5歳から70歳代まで、興味のある人は誰でも参加ができる。
- 多世代が交わる地域の居場所でもある。

毎週土曜日の夕方、石巻市立万石浦中学校の柔道場に、威勢のいい太鼓の音が響く。

「下を向かないで、前を向いて」

「掛け声を出したくなったら自然に出していい」

渡波獅子風流塾の定例練習だ。5歳から大人までの塾生が集まり、大太鼓、小太鼓、笛に分かれ、塾長の近藤敬宣さん（72歳）の笛や歌に合わせて1時間の練習を重ねる。保護者も鉦を担当して練習に混ざる。

曲の途中、小学4年生以上が一人ずつ大太鼓でソロ演奏を行い、5人で合わせ太鼓を披露する。塾生の顔つきや立ち姿が、一層、凛と見える。最年少の5歳児2人も、立ちっぱなしで練習に加わる。

太鼓が好き。獅子が好き。そんなみんなの思いが演奏から滲み出る。

地元の歴史を継承

鎌倉時代に生まれたとされる渡波地区の獅子舞は、「獅子風流（ししふり＝「振り」と呼ばれ、1981

年に石巻市の無形民俗文化財に指定された。かつては漁港の集落ごとに30数頭の獅子が繰り出し、お正月には一軒一軒を巡って家内安全、五穀豊穡、大漁満船を願い、悪魔祓いをしたという。

渡波獅子風流塾は、2008年元旦に発足した。市内にある「渡波獅子風流保存会」が子どもたちにも広める活動に消極的だったため、近藤さんを含む保存会出身の5人が、積極的に後継者を育てようと組織した。

「塾」という名称だが、無償のボランティアで運営されており、受講料などはない。誰でも参加ができ、未就学児から春に社会人になった若者、72歳のベテランまで、およそ40人が在籍する。小・中・高校生の割合は同じくらいだが、年齢が上がるとともに部活などの関係で参加のできない人が増えるため、練習に参加するのは平均15人ほどだ。練習の前には、小学生と保護者が太鼓をセッティングするなど、自主性は高い。東日本大震災では、鮮魚



渡波獅子風流塾 塾長 近藤 敬宣さん



「風化させてはいけない。この思いを後世に伝えたい」

店を営む近藤さんの工場と自宅が全壊。保管していた太鼓や獅子頭なども流出したが、失意のなかで泥にまみれた獅子頭を見つけたとき、近藤さんは喜びを感じたという。震災から1か月後には、子どもたちに「いつから練習を始めるの?」と促され、活動を再開した。現在は、石巻市を中心に祭事やイベント、仮設住宅などで獅子風流を披露する。

獅子風流は、獅子が家と家の間を移動しているとき、家に入るときなど、各場面によって曲調が7回変わり、獅子の動きも変化する。本来は獅子一頭と太鼓、小太鼓、笛の小編成だが、塾では団体で演じる形が定着。大人同士2人1組で演じてきた獅子は、いまでは中高生と大人が組んで演じるまでに塾生が成長した。

獅子風流の魅力と

多世代交流

口コミでの入塾が多く、小学生たちは太鼓の響きに魅力を感じているようだ。この日の練習には、1年1



笛を担当する姉妹

人、3年1人、4年3人、6年1人が太鼓に参加。ふざける子は1人もいない。無形文化財ゆえ譜面はないので、演奏を撮影した動画を見てメロディを覚えたという努力家ばかりだ。

中学3年の男子は、中学1年のときに万石浦中学校の文化祭で伝統芸能を学ぶ部活の発表を目にして、太鼓に目覚めた。「楽しいし、受験の息抜きになる面もあります」と話す。同じく中学3年の女子は、「太鼓の部活に所属しているけれど、獅子舞の部活を見て獅子もカッコいいなと思って」1年前に渡波獅子風流塾に入った。太鼓のソロ演奏部分は自分でメロディを

考えたといい、「高校に行っても続けたい」と目を輝かせる。

笛担当の高校1年と小学6年の姉妹は、ともに音楽が大好きで、震災をきっかけに渡波獅子風流塾に入った。「音楽でまわりの人を元気にしたい」と姉が笛をはじめ、それを追いかけるように妹が太鼓から笛に転身。高校生となり、活動に参加しにくくなった姉は、妹に笛を伝授することが使命と考え、また妹もそれに応えようと、姉の後ろ姿からメロディを盗み覚えている最中だ。

練習後には、中高生と大人が雑談を交わす姿があった。「高校に受かったらな」という大人からの励ましに、はにかむ中学生。ここは家庭や学校とは異なる、多世代の第三者と交わる地域の居場所でもある。

思いを後世に伝える

渡波獅子風流塾では、5月5日に「垂水神社湧水感謝祭」を開催している。これはライフラインが途切れた震災時、石巻市内で唯

一この湧水が、2か月に渡り延べ数万人の命を救ったことに感謝し、忘れないために震災の翌年から主催しているものだ。いつかは記念碑を建てたいと、地元企業などからいただいた協賛金を積み立てている。「私たちのどの渴きを満たし、心に潤いを与えてくれた命の水の存在を、風化させてはいけない。この思いを後世に伝えたい」と近藤さんは話す。そこには、郷土を愛し、文化を守ってきた近藤さんの深い思いがある。

指導するとき、近藤さんは声を荒げない。穏やかに諭すように声をかける。子どもたちも素直に応じる。400年継承されてきた獅子風流は、着実に未来へとつながっている。 **小**

DATA

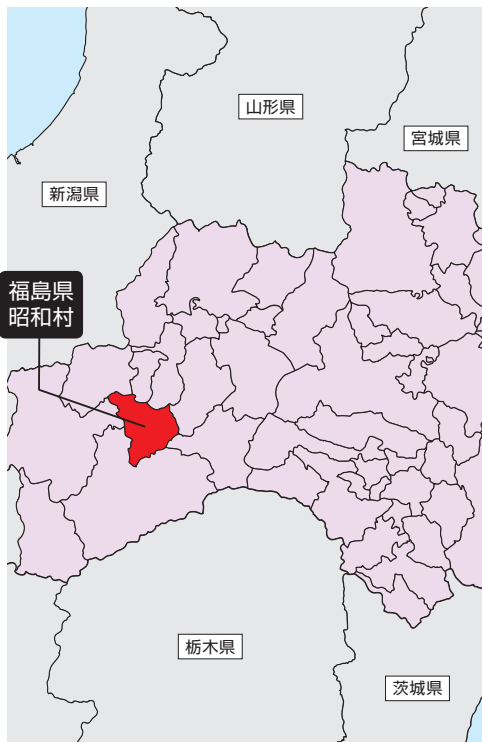
渡波獅子風流塾

〒986-2103

宮城県石巻市流留字五性橋9-10

URL <http://watanoha-44furi-jyuku.jimdo.com/>

E-mail watanoha44huriyuku@yahoo.co.jp



毎年8月16日に行われる佐倉集落の盆踊り。子どもから高齢者まで、多くの参加者でにぎわう

住民が愛好会結成し集落の盆踊りを復活

◎佐倉祭り愛好会（福島県昭和村）

ポイント

- 盆踊りなどの地域行事が住民同士のつながりをつくり、強くする
- やりたい人、好きな人が中心になれば、地域行事は継続しやすい

現在まで継続する3か所のひとつ、佐倉集落でも、一時期中断を余儀なくされている。35年ほど前のことだ。当時すでに村には人口減・高齢化の波が押し寄せており、村の集落のなかでも規模の小さな佐倉では、特にその影響が大きかった。盆踊りを主催していた佐倉行政区（自治会）が中止を決定し、少なくともその後4～5年の間、盆踊り

が行われなかった。集落のうち3か所で伝統行事としての盆踊りが行われている。8月半ばの旧盆の頃、広場や神社の境内に櫓（やぐら）が建つ。辺りが暗くなると提灯（ちようちん）に灯りがともり、祭り囃子（はやし）が響き始める。威勢のいい若者が櫓の上で笛や太鼓を奏で、年配の人たちが朗々と盆踊り唄を歌い上げる。ほかの集落からも祭り好きが駆けつけ、村に帰省中の人たちが、観光客も踊りの輪に加わる。

やりたい人が担い手に

村ではかつて、すべての集落で盆踊りが行われていたが、人口減と高齢化で運営が難しくなり、次々に中止へ追い込まれていった。当初から会長を務める本名昭司さん（73歳）は、集落人口の倍に当たる

福島県昭和村では、10ある集落のうち3か所で伝統行事としての盆踊りが行われている。8月半ばの旧盆の頃、広場や神社の境内に櫓（やぐら）が建つ。辺りが暗くなると提灯（ちようちん）に灯りがともり、祭り囃子（はやし）が響き始める。威勢のいい若者が櫓の上で笛や太鼓を奏で、年配の人たちが朗々と盆踊り唄を歌い上げる。ほかの集落からも祭り好きが駆けつけ、村に帰省中の人たちが、観光客も踊りの輪に加わる。

「復活して良かった。一度中断したからこそ、盆踊りのたいせつさがわかる」
こう語るのは、愛好会結成当初から会長を務める本名昭司さん（73歳）。
昨年8月16日の盆踊りに、集落人口の倍に当たる



盆踊りの櫓（やぐら）組み立て作業



佐倉祭り愛好会 会長 本名 昭司さん

「盆踊りを復活して良かった。」

一度中断したからこそ、そのたいせつさがわかる」

100人以上が集まった。佐倉の住民のほか、村に帰省していた人たちや、ほかの集落の住民らも多数加わった。また、佐倉だけでは笛や太鼓の奏者が十分そろわず、周辺集落から「助っ人」が駆けつけた。

盆踊りは、集落を超えた住民交流の場であり、村を出た人と残っている人が、再会を喜ぶ貴重な機会でもある。

運営費は、すべて住民の寸志、いわゆる「花代」でまかなう。行政区の補助は受けていない。愛好会のメンバーの大半が、今では行政区の役員になっているが、愛好会主導は崩さない。好きな人、やりたい人が担い手になる原則を守っている。

メンバーの二人で佐倉行政区の区長(昨年8月時点)羽染輝男さん(61歳)は、「腰の曲がったじいさん、ばあさんが杖をついてやって来て、子どもと一緒に手拍子を取ったり、踊ったりする姿を見ると、また来年もがんばろうという気持ちになる」と顔をほころばせる。盆踊りの復活で、「集落の住民同士のつながりが一層強まった」とも。

住民の笑顔引き出したい

盆踊りなどの地域行事が住民同士のつながりを強め、日常的な関係も円滑にする。日常の関係が良好なら、集落づくりも進めやすい。愛好会がそうであったように、「誰かが何かをしよう」と手を挙げれば、必ず仲間が集まる(羽染さん)。

愛好会の結成で最初に「手を挙げ」たのは、本名さんだ。盆踊りに限らず、集落の課題を発見すれば、常にいち早く行動を起こし、話し合いや実践の枠組みをつくろうと呼びかける。周囲の誰かが、それに応える。

たとえば、2004年に愛好会とほぼ同じメンバーで農用地利用改善組合を立ち上げ、耕作放棄地でのアスパラガスやソバの栽培に取り組んできた。アスパラガスは、畑の手入れや収穫・出荷の作業負担が比較的軽い。体力が落ちてひきこもりがちになっている高齢者に参加を促し、畑を生きがいづくり、体力づくり、集いの場とした。連作障害が出てきたこと

や、参加者が少なくなってきたことを受けて、14年からはソバに切り替えた。ソバ栽培は手間が掛からず、美しい白い花畑の風景を楽しめ、実を収穫してソバを打つこともできる。本名さんは新たに「佐倉蕎麦生産組合」を立ち上げ、一昨年から「佐倉蕎麦会」と銘打ったソバ打ち体験と食事を兼ねた住民交流を始めた。

「耕作放棄地が広がり、住民の笑顔が少なくなれば、集落は寂れる一方。今後とも住民が笑顔になれることをやっていく」と本名さん。

最大の課題は、次の世代へ集落づくりのバトンを渡すこと。人口減と高齢化のなかで、妙案は簡単には見つかからない。佐倉の高齢化率は54・7%で、中学生以下の子どもは2人だけ。村全体を見ても人口はわずかに1358人、一方で高齢化率は54・6%に達する(昨年11月1日時点)。

若い世代を当てにできない状況は、高齢者の活躍を引き出す面もある。

「集落を荒廃させないよう、自分にできることは体力が続く限りやる」

本名さんをはじめ村の各集落の、自身も高齢となった住民リーダーとその仲間たちは、口をそろえてこう語り、さまざまな活動に取り組む。だからだろう、高齢化率50%超でも寂れた雰囲気は感じられない。そんな村の様子にひかれ、少しずつでも都市部からの移住者は、あとを絶たない。

超高齢化社会でも、人が地域で生き生きと暮らすことはできる。小さな村の小さな集落が、そう教えてくれている。木

DATA

福島県昭和村

福島県西部、会津地方のほぼ中央に位置。周囲を山に囲まれた10集落で構成される。冬期の最高積雪量が2メートル前後に達する豪雪地。稲作を中心とした複合経営の農家が多く、近年は花卉栽培(かすみ草)も盛ん。伝統織物の繊維原料「からむし」の栽培と加工でも知られる。人口は1955年に4810人(世帯数812)でピークに達し、2015年11月1日時点では1358人(世帯数667)まで減少。高齢化率54.6%。10集落のうち佐倉集落は、人口53人(世帯数28)、高齢化率54.7%。



大石地区での中学生との練習

祭りは参加するもの!地域住民をつなぐ虎舞

◎大石虎舞(岩手県釜石市)

ライター: 元持幸子

ポイント

- 祭りに参加することで地域とつながる!

震災から4年目の2015年4月26日、岩手県釜石市唐丹地区で「春のさくら祭り大名行列」が復活した。復興公営住宅の建設や土地造成など復興工事が行われている唐丹町の中心部を、神輿や伝統芸能団体が練り歩いた。多くの人たちが、この祭りの再開を心待ちにしていた。唐丹町の南部に位置する大石地区に伝わる「大石虎舞」は、同地区住民と唐丹中学生による新たな踊り手を交え、華やかな衣装と威勢の良い舞いで祭りを盛り上げた。祭りの際は、大石地区を離れた人たちも集まり、結束する。「祭りは見るものではなく、自分が出て参加するものだよ」と、大石虎舞世話役の西野元さん(65歳)は祭りへの思いを話す。

漁師の無事を願う虎舞

釜石市には、集落ごとに伝統芸の虎舞やお神楽などを継承している団体が14あり、地域ごとに舞い方や衣装などに特徴がみられる。唐丹町大石地区の「虎舞」の歴史は、江戸時代にさか

のぼる。危険と隣り合わせの仕事をする漁師が、無事に寄港するようにとの願いが込められており、「虎は一日にして千里行つて、千里帰る」ということわざのごとく、虎の習性に託して舞ったという言い伝えがある。

「大石虎舞」は虎頭のほかに、ささら、和藤内、小踊りなどの踊り手の、総勢15人以上が演目に関わる。48世帯・96人が暮らす大石地区では、担い手の高齢化と後継者不足に悩んでいた。追い打ちをかけるように東日本大震災で祭りの道具を失い、さらに舞う機会や場所もなくなり活動は休止状態となった。

「大石虎舞はこの地域の誇り、ここでの暮らしには欠かせないものなんだ」と、大石虎舞の総責任者であり町内会長の畠山一信さん(68歳)は話す。大石地区には2001年まで小学校があり、学校で虎舞を教えていた。祭り以外にも地区の行事に参加し、虎舞を通じて地域の人たちと接点をもつことが多かったが、廃校にともない、地域と子

どもたちとの接点が激減した。

新たな中学生の舞い手

震災復興による地域づくりが進むなか、大石地域の祭りの再開に向けた動きが出てきたのは14年。唐丹地区の公民館のサポートを受けて、地域を盛り上げ、子どもたちの地域への愛着を育むことを目的に、唐丹中学校で虎舞を伝える機会が設けられたのだ。唐丹中学校では、総合的な学習として郷土芸能を学ぶ時間を設け、当時の3年生16人が大石地区に向き、週1回指導を受けた。

指導をしてきた橋本豊さん（66歳）と西野さんは、口をそろえて「中途半端には教えたくはない。大石での暮らしのなかで受け継がれてきた心意気をわかってほしい」と語る。これまでも、舞いの形のみならず、舞いに込める思いや地域の伝統のつながりをたいせつに伝えてきた。生徒たちは力強い舞いを披露することで、感謝と元氣、復興への祈りを伝えたいと練習に打

ち込み、地域の結束力が育まれた。

唐丹中学校の虎舞は、大石虎舞の人たちの指導や物品の寄贈、地元との協力による衣装制作によって、14年10月、唐丹中学校文化祭で初披露となった。その後も、上級生が下級生に舞いを伝え、全校生徒30人で取り組む。地域行事に積極的に参加しており、「生徒たちにとつて、地域とのつながりを実感し、自分の気持ちを伝えるもの」と唐丹中学校長の千葉伸一さん（55歳）は話す。今後も学校として取り組んでいく方針だ。

大石虎舞は、地域にかかわる人たちをつなぎ、豊かで厳しくもある海の自然と向き合ってきた唐丹の人たちの知恵と心意気を伝える、地域に根づいた仕組みなのである。

DATA

大石虎舞

〒026-0120
釜石市唐丹町字小白浜61番地
釜石市立唐丹公民館内
TEL 0193-55-2111

東北福祉大学 総合福祉学部 教授 (博士・情報科学)

金 政信 (こん・まさのぶ) さん



岩手県立大学の助教授を経て、2005年東北福祉大学の准教授、2012年に教授。地域社会における情報の役割や、人びとと地域資源の共創をテーマに地域貢献できる人材育成やコミュニティ再構築の可能性の研究を行っている。現在は、地域共創福祉論、地域マネジメント論、NPO論（通信教育）などの講義を担当するほか、キャリア教育にも携わり、学生のキャリアマインド向上のための、子どもたちへの支援をおとした体験型学習や支援教材の開発、キャリアデザイン等のキャリア支援講座も実践している。

専門家に聞く地域づくりのヒント

コミュニティ再生に必要な力を築く(養う)

～郷土芸能や祭りをとおして～

地域社会(構造)の変容によって、住民の暮らし方、行動の仕方、価値観などは、だいぶさま変わりしてきている。特に、家族やコミュニティ(地縁社会、共同社会)の機能は、ますます希薄化や間接化が進んでいる。コミュニティ再生に必要な能力とは、経済的能力ではなく、人との出会いをつくり、互いの交信を通じて育まれる人間関係構築のための活動能力の向上であると言える。わが国には、古くから日本の地域社会が持っていた相互で助け合い、支え合いといった、「結い」や「講」の機能や、それぞれの地域に昔から伝承されている伝統芸能や祭りといった文化があった。しかしながら、それらの機能や文化は、すでに希薄化し、減少もしくは消滅しかけている現状にある。そのようななか、コミュニティ再生のための人間関係構築のための活動能力を身につけるためには、伝統芸能や祭りの復興や再生は有効といえよう。

そこで、今回特集でとり上げた3つの事例から、特に人間関係構築のための活動能力再生となるようなヒントを3つ挙げてみる。

1つ目は、いずれの活動においても充実感あふれる良きリーダーが存在していたことである。良きリーダー無くして人間関係の構築は困難であろう。リーダーたるもの、地域への愛情と幅広い心を持った人がよいだろう。また、地域のために汗をかき、涙を流せること。徹底したボランティア精神とコミュニケーション能力も必要であろう。できれば、総合的かつ柔軟的な調整や、人を動かす知恵があればとても良い。3つの事例には、この役を担っている人がいる。

2つ目は、人間関係の構築の活力源は「人」である。活力を呼び起こすのは、行政の力に依存することや、「お金」ではなく、人を動かすことである。佐倉祭り愛好会の活動がそれである。国や市町村の行政、補助金に頼りきりでは、コミュニティも人も育たない。それでは、人という貴重な活力源を動かすには、一体何が必要なのか。人びとに出番をつくり、感動や充実感を与える機会をつくることである。3つの事例からも、やりたい人や興味を持つ人は、老いも若きも伝統芸能の伝承の場や祭りに参加することで、郷土愛に目覚め、さらには感動する。地域への感謝をおして、改めて地域の一員であることに、自ら目覚め、社会参加への一歩を踏み出す。人は、人と人、コミュニティとコミュニティ、人とコミュニティとをつなぎ、そして伝統芸能や祭りの復興や継続へともつながるのである。

3つ目は、子どもたちが動けば、必ず大人たちも動くということである。芸能伝承の場で練習に打ち込む、時には羽目を外して遊びまわる子どもたちの姿は、願ってもない地域の宝であり、貴重なエネルギー源でもある。汗にまみれて練習に打ち込む姿は実に頼もしい姿であろう。渡波獅子風流塾のように、多世代が交わりお互いの存在感を認め合い、時に厳しく叱咤激励し、時にほめたたえる姿は活きた人間教育の場でもある。次世代を担う子どもたちもまたそんな居場所を望んでいるはずである。もう一つ付け加えるならば、小中学校を度外視した活動であってはいけない。大石虎舞のように、学校側の最大の理解を得ることで、活動への共創関係が生まれる。

元食堂が、バリアフリーの常設サロンに！
いつでも、誰でも、自由に出入りができる。

お茶請けは、食堂名物のお団子。
お昼時には、
餅入りラーメンも復活！

持ち込みも自由で、自慢の漬けものを持ち寄ってお茶飲みを。

水曜日には、障がいのある人たちがつくった豆腐や卵を販売。

町内サロンや、親子サークルも活動中！

合言葉は「地域のつながりが生まれる場所」「生涯現役」

おばあちゃんの
ツネをして、私も
上手にできるかしら



高齢者にストレッチ体操を教わる子どもたち



ストレッチをしたあとに、お団子で団らんする軽体操サークルの皆さん。
「体操をすると体が軽くなる」「おしゃべりが楽しみなの」

DATA

第三地区サロンきじま

山形県山形市円応寺町6-1
TEL 023-641-6033
OPEN 9:00~15:30
火曜定休



青木賢一郎さん(右)と鬼嶋弘さん



通りに面した1階にある「第三地区サロンきじま」。裏手が駐車場



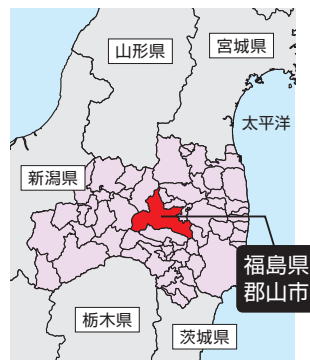
お団子は4種類。20本まとめ買いする人も

23町内を束ねる「第三地区」は、住民活動の意識が高い。アンケート調査や、町内会ごとに町内会長と民生委員と福祉協力員との三者懇談会を実施する一方、市の介護予防推進支援モデル地区として軽体操やサロンの場を広げてきた。15年5月に12か所だったサロンの数は、年末に23か所に倍増。ほとんどが週1回活動しており、「第三地区サロンきじま」と連動した支え合いの地域づくりを目指す。 **小**

山形市の第三地区で長年、団子屋兼食堂を営んできた鬼嶋弘さん(84歳)は、閉店していた店舗を常設サロンにしたいと決意。第三地区社会福祉協議会会長の青木賢一郎さん(87歳)の応援を受け、山形県高齢者等活動拠点創出事業を活用してバリアフリーに改修し、「第三地区サロンきじま」を2015年11月4日にオープンさせた。鬼嶋さんは、病に倒れた奥様を地域から孤独にしないために、そして「知らない人同士が交流して、孤独のない地域に」するために、改修費に自己資金も投入。団子屋は残し、一本100円で提供して売上金でサロンの運営費を捻出する。地元味が復活したと喜ぶ人や、おじいちゃん世代とのふれあいを楽しむ親子などが訪れ、ぬくもりにあふれる。

行政、社協、NPOらが 役割を分担し密接に連携

福島県郡山市



福島県郡山市は、東日本大震災で多くの住家被害を受け、現在も約1千人が避難生活を余儀なくされている。原発事故では、避難指示区域はないものの、一部地域で放射線量が上昇、今も除染作業が続く。放射線による健康被害への不安から、昨年11月時点で4千人あまりが市外に自主避難している。

原発避難者らが暮らす「民間賃貸住宅借り上げ仮設住宅」だ。

市外に暮らす自主避難者には、主に市総務法務課避難者支援係が対応する。電話や窓口での相談の受け付け、市の広報や支援情報紙の送付、全国各地の避難者交流会への市職員の派遣などを行う。さらに今年度、自主避難者が多い新潟県新潟市（745人が避難※昨年11月1日時点）に相談支援拠点を開設。サロン開催、相談対応、各種情報提供のほか、生活状況調査や帰還に向けた意向調査などを行っている。

から15年3月までは5人。同4月以降は、県の増員方針を受けて15人となった。これに併せて組織体制も一部改め、地域福祉課内に避難者生活支援相談室を新設。支援員は同室へ配属されている。15人のうち、見守りなどの現場業務に当たるのは10人で、全員が社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士など福祉・介護分野の有資格者。

村社協の支援員や民生・児童委員に同行する形で、まず全戸訪問調査を順次実施。高齢の独居者や夫婦だけといった定期的な見守りが必要な世帯を抽出し、各町村社協の支援員と共同、または市社協の支援員が単独で、定期訪問を行う。訪問頻度は、各町村ごとの対象世帯数や生活課題にもよるが、週1回から3か月に1回程度まで。訪問活動の一部は、福島県相談支援専門職チームとも連携して行う。

一方、原発事故の避難指示区域（原発避難地域）から市内への避難者は、同10月時点で7千人を超える（「まちデータ」参照）。

被災・避難者向けに整備される市内の公営住宅は、地震被災者向けの「災害公営住宅」（既存の市営住宅90戸を改修、入居開始済み）と、原発避難者向けの「復興公営住宅」（570戸を建設、今年度末までに490戸完成予定）がある。

具体的活動内容は、富岡、双葉、川内3町村からの避難者が暮らす市内のプレハブ応急仮設住宅では、各町村社協主催のサロン活動などを支援しつつ、市内の生活に関する相談の受け付けや情報提供などを行う。

原発避難者が暮らす借り上げ仮設住宅については、同3町村と、市内への避難が比較的多い大熊、浪江、楢葉の3町を加えた計6町村の避難者を対象に、各町

訪問対象世帯が復興公営住宅に入居者も参加した（昨年12月5日、日和田地区。写真提供：みんぶく）

原発避難者向けに支援員

被災・避難者に対する生活支援の体制を見ると、市内の地震被災者には、原則として一般市民向けの保健・医療・介護・福祉の枠組みのなかでの対応となっている。

原発避難者に対しては、市社協の生活支援相談員（以下、支援員）が、避難元の社協の支援員と連携し、避難者の交流、見守り、相談、各種情報の提供、生活課題に応じた介護や福祉などの専門職・機関へのつなぎなどを行う。

市社協の支援員数は、2011年10月の配置当初

訪問対象世帯が復興公営住宅に入居者も参加した（昨年12月5日、日和田地区。写真提供：みんぶく）

仮設住宅は、形態別に3つに分けられる。市内の地震被災者向けの「市営住宅」（空き住戸を借り上げ仮設住宅として利用）、原発避難地域のうち富岡町、双葉町、川内村からの避難者向けに建設された「プレハブ応急仮設住宅」、それに地震被災者、自主避難者、

市内の地震被災者には、原則として一般市民向けの保健・医療・介護・福祉の枠組みのなかでの対応となっている。住宅整備を含めた市の関係部課、市社会福祉協議会、地区および支部社会福祉協議会、各地域包括支援センターなどが、生活課題に応じた支援する。

市社協の支援員数は、2011年10月の配置当初

市社協の支援員数は、2011年10月の配置当初



地元町内会のソバ打ちイベントに復興公営住宅の入居者も参加した（昨年12月5日、日和田地区。写真提供：みんぶく）



郡山市社会福祉協議会の避難者生活支援相談室。生活支援相談員が配属されている。

住宅に転居したり、住宅を自主再建した場合でも、当事者の意向や生活状況によっては定期訪問を継続する。

支援関係者が「連絡会」

復興公営住宅では、コミュニティづくりを担当する「特定非営利活動法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会」（通称「みんぶく」）

と協力し、入居者の見守りや交流促進に取り組み。

みんぶくは、県の委託事業としてコミュニティ交流員（以下、交流員）を配置。

交流員は、入居者同士や地域住民との交流イベント開催や自治組織の立ち上げ・運営支援などを行う。また、各団地ごとに週2〜3回の頻度で集会所に日中滞在し、住民が好きな時間に訪れ、気軽にお茶飲みや趣味の活動を楽しめるようにしている。ここに市社の支援員も詰め、求めに応じて傾聴や生活相談に当たる。また、交流員がイベントのチラシ配布などで戸別訪問をする際、同行して見守りを行う。

交流員は、復興公営住宅100戸につき2人の割合で配置する。昨年12月1日時点の配置人数は、市内に11人、県全体で24人。計画戸数4980戸がすべて完成すれば、最大で98人程度となる。

みんぶくのスーパーバイザー、橋本修さんは、「孤立防止も自治

組織立ち上げも、まず交流会で顔の見える関係づくりをしないと何も始められない。会を重ねれば、近所づきあいが生まれ、自治組織の役員になれる人もわかってくる」と語る。

市社協の支援員の一人で、精神保健福祉士の神山貴裕たかひろさんは、「復興公営住宅は高齢者が多く、入居後も故郷への帰還に悩み、近所づきあいに消極的な人が目立つ」と指摘、長期継続的な支援の必要性を訴える。

市社協は、みんぶく、避難元の各町村社協、県社協らと2か月に1度、「市内の応急仮設支援等に関する連絡会」を開き、情報共有や支援方針の確認を行う。

このほか、毎月第1・3水曜日、借上げ仮設住宅の入居者向けサロン「茶話カフェRococo」ろころの開催、避難者向け情報紙「Rococo」ろころ「こころ」の発行も手がける。

震災と原発事故の被災と避難が錯綜する状況に、関係機関・団体が連携を強め、役割分担を明確にして一日も早い避難者の生活再建を目指す。**木**

まちデータ

福島県郡山市

郡山市は人口32万9567人、世帯数13万7302、高齢化率24.2%（※昨年11月1日時点、県現住人口調査）。東日本大震災では死者15人、負傷者5人、家屋の全半壊2万4167棟などの被害を受けた。住宅を失った市民向けの仮設住宅は、既存の市営住宅や民間賃貸住宅を借り上げ仮設住宅として確保。昨年11月末時点での入居者は、市営住宅10戸に21人、民間賃貸住宅548戸に1088人。地震被災者向け災害公営住宅は、既存市営住宅11団地の空き住戸改修で計90戸が用意され、うち約20戸が入居済み。市内に原発事故の避難指示区域はないが、健康被害を懸念した市外への自主避難は、同11月1日時点で全国に4623人。一方、原発避難地域から市内への避難者は、同10月1日時点で7886人。内訳は、いわき市8人、田村市138人、南相馬市504人、川俣町19人、広野町16人、楢葉町130人、富岡町2819人、川内村562人、大熊町1006人、双葉町703人、浪江町1665人、葛尾村268人、飯館村48人。富岡、双葉、川内3町村の避難者向けには、プレハブ応急仮設住宅を市内6地区に計1273戸建設。同11月末時点で688戸に1184人が暮らす。富岡、双葉の両町は、それぞれ市内に役場事務所、支所を置く。ほかの市町村からの避難者も含む残りの約6700人は、借り上げ仮設住宅に入居。原発避難者向け復興公営住宅は、市内17か所に計570戸整備する。うち314戸は同11月末時点で入居開始済み。今年度末までにさらに176戸が完成する。1か所80戸（1棟2戸）を除き、すべて集合住宅。



まじわる!

災害公営住宅

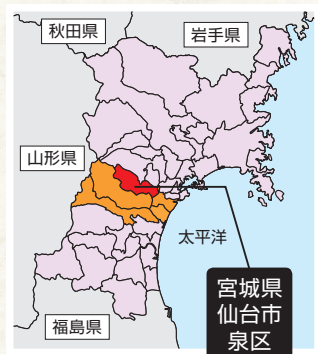
第12回

住民と福祉施設による 新たな地域づくり

泉中央南復興公営住宅 (宮城県仙台市泉区)



「一緒に歌いましょう」と客席を囲むように並んだ出演者と、客席の地域住民(望岳荘 地域交流ホール)



宮城県仙台市の泉中央南復興公営住宅(仙台市泉区泉中央南12番8)は、仙台市泉区にある唯一の復興公営住宅で、昨年4月に入居が開始された。住戸数は193戸で、12月31日時点では185世帯が暮らしている。区のまちづくり推進課や社会福祉協議会、地域に住む人たちははたらきかけなどもあり、同住宅1階の集会所などを活用して、入居者同士の交流や、入居者と地域住民の交流が図られてきた。

12月12日には、同住宅から徒歩3分ほどの距離にある高齢者総合福祉施設「望岳荘」(仙台市泉区泉中央南15番地)の地域交流ホールでクリスマスコンサートが行われ、同住宅入居者や地域住民、望岳荘の利用者が招待された。望岳荘は、社会福祉法人愛泉会が運営する福祉施設で、5階建ての施設内に、ケアプランセンター、デイサービスセンター、特別養護老人ホーム、ケアハウスが設けられている。

当日は、近隣に住む親子など、ホールに110人以上が来場。「ろりぽっぷ 泉中央南園」「ジュニア&ユースコーラスRaw・Ore」「加茂中学校吹奏楽部」による、演奏・合唱が贈られた。3団体に所属する園児から大学生までの発表で、クリスマスソングなど観客に馴染みのある曲が、アンコールも含め約90分間に渡り披露された。来場者も、手拍子をとったり、歌詞を口にしたたり、歌を楽しみながら癒しのひと時を共有した。

同コンサートは、愛泉会が「望岳プロジェクト」と称し、5月頃から企画してきたもの。同施設と同住宅

の入居者、周りに住む地域の人たちの親交をいっそう深めてもらうため、愛泉会が運営する4か所の介護施設や、区内3か所の地域包括支援センターが合同で意見を出し合い、準備を進めてきた。

同施設には、地域住民のボランティアがスタッフを務めるカフェコーナーや、遊具の置かれたキッズスペースが常設されている。コンサートを楽しむだけでなく、カフェコーナーで茶を飲みながら会話をしたり、乳幼児と遊ぶ来場者も見られた。地域の住民同士が交流し、親睦を深めるきっかけづくりとなっている。

「社会福祉法人は地域に貢献するもの。ケアを利用していない人にも、望岳荘



泉区唯一の復興公営住宅「泉中央南復興公営住宅」

を知ってもらい、福祉的な相談や、住民同士の交流の場として活用してほしい」と、常務理事の鈴木峻さんは語る。

開催を周知するため、同施設でプロジェクトを担当する地域コーディネーターがチラシを同住宅に全戸配付したり、区のまちづくり推進課をおして共同玄関前に掲示。ほかにも近隣のクリニックに貼らせてもらうなどして、掲示された案内を見たのをきっかけに来場した人もいた。

同住宅の入居者たちは、12月5日に「泉中央南町内会」を設立し、住民同士のさらなる交流活性化や共同生活の環境改善のために大きな一歩を踏み出した。設立総会には、入居者のほか、区まちづくり推進課や区社協、隣接地域の町内会、望岳荘などの福祉機関も出席し、会発足に立ち合っている。

望岳荘の利用者も、復興公営住宅に住む人たちと同様に地域で生活している。望岳荘も、町内会と連携しながら地域づくりに努めていく計画だ。

入場
無料!

支え合い
S-1
グランプリ
第3回いがす大賞

地方創生、
介護保険・総合事業の
ヒントがあります!

東日本大震災・おらいの地域の元気興し

I.A
出場者決定!

「いがす」とは、「いいね!」「了解しました」などの意味をもつ東北地方の方言です。
各地の支え合い活動や元気な取り組みを発表し、交流することで、
互いに称え合い、学び合って、素敵な支え合い活動が各地に広まり、
豊かな暮らしにつながることを目指します。

観覧無料

タイムスケジュール

12:30	開場	16:30~16:50	審査/休憩
13:00~13:20	開会式	16:50~17:05	表彰式/閉会式
13:20~14:20	実践発表①	17:05~17:30	交流タイム
14:20~14:30	休憩		
14:30~15:30	実践発表②		
15:30~15:40	休憩		
15:40~16:30	実践発表③		



★ 会場：エル・パーク仙台 スタジオホール（仙台市青葉区一番町4丁目11番1号 141ビル6階）

★ 発表者（全16組）※発表順は当日公表します。

岩手県一関市	関が丘第二雇用促進自治会	宮城県石巻市	寄合処 とやけの花
岩手県釜石市	栗林共栄会	宮城県女川町	一般社団法人 コミュニティスペースうみねこ
岩手県大槌町	ままりば	福島県郡山市	一般社団法人 幸齢社会プロジェクト
岩手県大槌町	おおつち おばちゃんくらぶ	福島県郡山市	いきいき友和会
岩手県陸前高田市	冬の華わらびの会	福島県郡山市	ラジオ体操&歩こう会
宮城県石巻市	ケアスタジオJSU	福島県昭和村	中向農産物直売の会
宮城県石巻市	特定非営利活動法人 ベビースマイル石巻	山形県山形市	第三地区サロンきじま
宮城県石巻市	渡波獅子風流塾	大阪府寝屋川市	SA北河内 百楽の会

●主催「S-1グランプリ 第3回いがす大賞」実行委員会

事務局 全国コミュニティライフサポートセンター(CLC) 〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737 担当:小野寺(知)、清野

ともに生きるためのヒント

わかり合うための最初の一步

特定非営利活動法人ノーマライゼーションサポートセンターこころりんく東川 副理事長／
北海道東川町共生サロンこころりん・相談センターこころりん運営者／ソーシャルワーカー 大友愛美



「同じように自分の苦手を指摘されても、傷つくときと、嬉しいときがある」と、職員ミーティングで、ある職員がつぶやいたことがありました。自分の苦手な部分を、同じように指摘されたはずなのに、ダメ出しをされたような気持ちになる場合と、理解しても



職員ミーティングの様子（昨年12月4日）

らえているとわかり、安心する場合がありますというのです。なるほど、そのとおりだと思います。日本には「察する」という文化があります。「きつと、この話題は触れられたくないだろうな」と察して、頼まれたわけでもないのに触れないように気を遣い、「きつと気を遣って触れないでくれたんだろうな」と相手の思いやりを察して、そつと感謝の念を抱くという感じでしょうか。そのためか、多くの人が障がいのある人に対して「障がい」のことは、触れられたくないことだと「察して」、触れないことが多いような気がします。しかし、実は障がいのことを含めて理解されたいと思っ

ている人もたくさんいるのではないのでしょうか。障がいをマイナスだと思っ

てほしい相手だったり、察してほしい相手だったりしたときは、行動で伝え合うということもできます。一方的に言葉で伝えるのではなく、まずはじつと相手の行動を観察する。先入観なく、あなたを理解したいという気持ちで見ていると、案外いろいろなものがわかってくるかもしれません。察し合えた時より、しっかりとわかり合えた時や、確実に通じ合えた時の方が仲良くなれた気がします。難しいことを考えるより、まずはしっかりと相手からメッセージをしつかり受け止めること。言葉であってもなくても、これが最初の一步になります。人間関係の作り方は、結局それにつぎののかもしれない。

いをマイナスだと思っ、ダメ出しはされたくないけれど、障がいを正しく理解されていると感じることは、うれしい体験になることもあるのです。障がいがあってもなくても、知らない相手と親しくなるには、お互いのことを理解し合うという過程がたいせつです。だから、時には変に「察する」ことはやめにして、「仲良くなりたいので、あなたの障がいのこと教えてください」と、率直に話しかけることが一番の近道になることもあります。もちろん、察してほしい人だっているでしょうが、本当に仲良くなり、親切にしたいければ、文字どおり知り合うしか道はないような気がします。

せつかく同じ言葉を話すのですから、言葉でわかり合うとすることは、とても良いやり方です。でも、もし仲良



おおとも・よしみ=北海道旭川市在住。知的障害者入所施設に勤務後、地域で暮らす障がいのある人とその家族を支援する制度外の事業所を運営。現在は、共生社会の実現を目指すNPO法人を拠点に支援者養成などの仕事をしている。

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

新年の抱負

今回は新年を迎えて、「抱負」について考えてみたいと思います。

冒頭から恐縮ですが、抱負をもって新年を迎えるということを、忘れて久しいですね。震災の影響というよりも、年齢を重ねて希望的な抱負を抱くことに、ハードルを高く感じます。そして抱負と言っても、自分自身のためというよりは、たとえば家族のために頑張る！という（勝手な）抱負のほうがモチベーションはあがるようです。

この年になると、いかにモチベーションを持続させるかがたいせつです。そのためには、誤解でも妄想でもよいので「人から頼られている」と思えることが、欠かせません。

実は、年を重ねて、昔自分が嫌いだった「偏屈」「頑固」「独りよがり」の親爺その者になりつつあると実感します（既になっているという指摘が多い）。隣のコーナーの筆者、浜上さんのように、万人に対して優しさを伝えられる存在になれないことは確かです。修行の違いでしょう。新年早々、頑固親爺の独白めいた内容になりました。

一つだけ、宮城県サポートセンター支援事務所としての抱負をお伝えします。サポートセンターの皆さんの役割を、平時の地域社会においても地域福祉の担い手として、また地域の住民力（福祉力）の象徴的存在として、地域福祉のサポートセンター機能を展開してもらうこと。これに尽きます。そのころは、「デマンド（需要）を意識する」と謎解きます。介護保険制度では「介護予防」という言葉をよく聞きますが、元気な高齢者に必要なのは、地域で人とつながり、「生きがい」「居場所」のある生活です。もっと地域社会で「豊かさ」「贅沢さ」を希求させてください。私の将来のためにも、よろしく！

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



地域支援に携わる人に求められることは？

前回は、地域支援に携わる人に求められることとして、地域に関心を持ち、地域を知って、地域に親しみ馴染んでいくことを書きました。

地域のことを知り、地域の行事や会議などの場に参加し、いろいろな人や団体の役員と話をすることがたいせつです。一見、無駄なように思われるかもしれませんが、地域に親しみ馴染んでいくプロセスとしてとても意味のあることです。支援する側が地域に関わるということは、地域の人が支援する側を知る、親しむ、馴染むということでもあります。信頼関係は、にわかには生まれません。親しみ、馴染み、信頼関係が生まれることで、お互いの伝えたいことや聴きたいことが少しずつできるようになるのだと思います。そして、できればその地域を好きになること。支援者側が、「より良い地域になってもらいたい。少しでも地域のために役に立ちたい」と思うようになれば、その思いは地域の人に必ず伝わります。

人が、地域が、動くようになるには時間がかかります。「地域福祉は、人の意識に働きかける活動」とも言われます。いろいろな関わりや働きかけを通じて、少しずつ、微妙に意識の変化が生まれます。「地域を信じて、一緒に考え、一緒に良い地域にしていく」という支援者側の誠実な姿勢が、地域活動に携わる前提であり、スタートなのだと思います。

地域活動に早く成果を！と求められることもあると思います。しかし、地域活動は、ものを創るように、目に見えてすぐに成果が現れるものではない、ということを押さえておく必要があります。焦っては決してうまくいかないのが地域活動です。諦めずに根気よく関わっていくことをお勧めします。

平成27年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<市町別事例研究会>

【多賀城市会場】2月8日(月) 多賀城市役所 / 【若林区会場】2月15日(月) 若林区文化センター

講師：大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

【岩沼市会場】2月10日(水) 岩沼市総合福祉センター / 【名取市会場】2月12日(金) 名取市文化会館

講師：志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<地域福祉コーディネート中堅研修>

【仙台会場】2月29日(月)・3月1日(火) 会場調整中

講師：藤井 博志(神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授)

浜上 章(宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー)

浅野 恵美(美里町社会福祉協議会 地域福祉課 地域福祉係長)

眞熊 孝史(東松島市社会福祉協議会 地域福祉課 東松島市くらし安心サポートセンター 主任相談支援員)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



暮らしを支える支援員17

支え合いの 地域づくりを目指して



七ヶ浜町社会福祉協議会（宮城県七ヶ浜町）

七ヶ浜町では昨年12月、町が整備する最後の災害公営住宅24戸について、鍵の引き渡し式が開かれた。これで町内5か所に、計212戸の災害公営住宅が完成。6か所あるプレハブ仮設住宅のうち、2か所は今年度中に退去がすすみ、2016年度中に解体となる予定。自主再建や防災集団移転、災害公営住宅への転居が着々とすすむなか、転居先でのコミュニティづくりに本格的に取り組むこととなる。

みなし仮設住宅への支援を続けてきた七ヶ浜町社会福祉協議会では、サロンの開催などの地域情報や生活再建に関する情報、災害公営住宅などの進捗状況を盛り込んだ広報紙「かえる通信」を発行し、戸別訪問時に配付してきた。広報紙を持参することが訪問するきっかけにも、会話の糸口にもなっていたが、転居がすすむなか、昨年12月発行の第12号をもって閉刊した。特定延長を希望しているみなし仮設世帯には、必要に応じて訪問活動などを継続していく考えだ。また、町主催の災害公営住宅の入居者説明会に参加しながら、地区の区長や民生委員とともに、入居者との交流をお手伝いしてきた。引き続き災害公営住宅入居者と周辺地域の人との融和と、見守り体制の充実を図りたいと考えている。

2014年4月には支え合いの地域づくりを目指して、第2

期地域福祉活動計画「みんなで支える幸せプラン」を策定し、今年の6月には第3期計画が施行となる。また、昨年7月には改正された介護保険の新しい総合事業において生活支援体制整備事業を町から受託した。昨年9月より生活支援コーディネーター（第1層）を1人配置し、11月には協議体が発足。協議体は、行政区長や民生委員、ボランティア団体、介護事業所など12人の委員で構成され、第1回会議では支え合いの地域づくりについて活発な意見交換が行われた。町内の活動者に若手がないという悩みや、誰もが気軽に通える常設サロンが必要ではないかとの意見が出され、「若い人や男性が参加しやすい仕組みづくり」「制度上のサービスと、制度外サービスとのつながりづくり」などのキーワードが出された。12月には住民向けの研修会を開くとともに、第2回会議が開かれ、委員が所属団体メンバー数人とともに参加し、グループワークを行った。年度内に、さらに2回の会議を開き、議論を深める計画だ。誰もが地域で最期まで暮らし続けられる地域づくりが、復興をもあと押しする。小

DATA **七ヶ浜町社会福祉協議会**
〒985-0821 宮城県七ヶ浜町汐見台7-8-153
TEL 022-349-7781 FAX 022-349-7782

お知らせ ☆次号予告 特集「子育てママの力を生かす」

平成27年度 福島県・地域支え合い体制づくり事業

<被災者生活支援の基礎と災害公営住宅への転居期における研修(実践編)>

【福島会場】2月4日(木)・5日(金) 福島テルサ

講師：大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

凧 保憲(淡路市社会福祉協議会 事務局長)

【郡山会場】2月16日(火)・17日(水) ビッグバレットふくしま

講師：大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

岩城 和志(淡路市社会福祉協議会 参事 兼 地域支えあいセンター いちのみや センター長)

【二本松会場】2月18日(木)・19日(金) 二本松市商工会議所

講師：大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

凧 保憲(淡路市社会福祉協議会 事務局長)

平成27年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修事業

<分野別研修Ⅲ～処遇困難事例の「困難」の理解とその対処法～>

【釜石会場】1月25日(月) 釜石・大槌地域産業育成センター

【盛岡会場】1月26日(火) アイーナいわて

講師：酒井 保(ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター)

高橋 正佳(国見・千代田のより処 ひなたぼっこ、石巻・開成のより処 あがらいん 管理者)

購読者を募集しています!

【月刊 地域支え合い情報】を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先

●ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：02260-9-46303

加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。

平成27年度 宮城県生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)養成研修

<初級研修>

【気仙沼会場】1月28日(木) 気仙沼市民会館

【大崎会場】1月29日(金) 古川商工会議所

【登米会場】2月1日(月) 登米公民館

【栗原会場】2月2日(火) 築館農村環境改善センター

講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合福祉学部 教授)

志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)